



3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2

門號卷
15
1544
4



田料年卷之四

事部

○旧友有自前山乃活よ加賀主へ々と経てと附長
官禁本体之ニ佐政府に言ヒ而再興ちりの元禄七年之
けけの辛酉年と往すかにけ原代よかひらすの下の其
此人あつててかひを通ひの事無トモ皆すゑ毎々の書文
あれ御室ゆき才女をもま近ね庭
月たすとくとてや御次第も御おほき
奇人アキシホモモアリ也りとも奇人
もしくるふよあはれつりよ國まともて御からんじとて日本
逸士の著述あり日本は紀ノ國と稱すもアリても功
人なりより也し竹子の垂加藤の門下より始申社名爲のと
數多じしたよ仲キヨ再無うよヌモアリ以んり候ひたゞ
鴻毛も小くナリケルありアリテ一せうすすめを有りん

ものもくじれ様をあひ國の事、まことに此すとあは
あふたゆくちるよしらへ——観音寺先ちの一遍と人のりより
奉、あ志惠院はゆう圓光大作乃繪額作ノモ全の像後
情保防門の多羅と馬うゆひし——ふあすふきやり
○加賀主再興乃わ年は追落候ハ那美空主基朝臣故
實者よ勤め候ハ、後殿アタシとらし筋通してあり
と申て、すら馬り、屏風のほりかにしや、秘教の
古記録と撰り候に、筋を、仕づよ白引て、官令と
終す——うそとも御堂が、おまに化成の至らぬるも
ありうる、實才と、脅し、而、悔意、之からふぐくあく
事、止一やまとよづりぬ

○うかはの度根侯乃門のすす小笠原作第三流乃

同式並札式と、かくかくえ根侯開示帝候
と、此の御付被士候者、の後者、御次の役とは、に、す
ありと、かの名うかり、の後者、よし人情からて太刀わ浅
つよむすうが、かくと、方セテ、小被士、の後すも、く太
力と、居た、いりと、あ入と、も、い、うと、も、あや、するが
老練の人、も、卒了事、す、と、聞きて、かくセ、され、事辨
べて、対宜と、うる節れと、あうと、二五と、ぞ、やうるたと
○故人、彼不所敵の多能の、うそて、活よ坐を、ゆうじ、管も
経も、背^{モニラム}し、うも、体、よ、手、うの、洋よ、さ、い、和漢と
水の、ねうふり、うだね、ば、ね、うや、と、手、うれ、其、祝
と、まもろと、ううう、小笠原、今、梁家十二宿主、守

壹越断金平調勝絶下無双羽扇鐘黃鐘寧鏡
盤膝神仙上無手りもと唐樂十二律不配三五
黄鍾大呂太簇夾鍾姑洗仲呂蕤賓林鍾夷則
南呂無射應鍾宮角のす小壹卦と黄鍾小呂と並ぶ
ウルトドリにはまよてのアシナガツ双調はすてんじでらふだ
鳴鐘以上管絃乃多の事から凡十二律へたゞてのアシナガツ
のち下に夏冬ときめくちると紫の事アシナガツの事と
アシナガツと並べられてもかねてからとの事と
その事と並ぶに充て下青の極く響き後より角く小吹才
下青に至り六次を充てすもとアシナガツより鳴鐘止むの
極く下の古音謂黄鍾と律アシナガツ九寸八寸小経く
アシナガツの事凡てアシナガツ所以下甲しの事と黄鍾と
乙未鳴鐘と甲子と小吹アシナガツ壹越と十音とアシナ
う人卒小音アシナガツ院の今俗用優曲者の一不トニアシナガ
チム音アシナガツ不の脚壹却乃不不ると俗用ムハヤビ
ユーテムアシナガツ脚に失ひアシナガツアシナガツアシナ
カシナガツアシナガツ事と偏れてアシナガツ官生微微生高商生
羽生角角生官止法アシナガツ十三絃子配する時順八
連六アシナガツ脚アシナガツアシナガツアシナガツアシナ
網アシナガツ脚アシナガツアシナガツアシナガツアシナ
アシナガツアシナガツアシナガツアシナガツアシナガツアシナ
アシナガツアシナガツアシナガツアシナガツアシナガツアシナ
アシナガツアシナガツアシナガツアシナガツアシナガツアシナ

四前手と左手小指からだよりは下へ行かず右へまく
多くはもとより全体解せざる事多きが爲牛小歎
食せらるべ

○圓頭の樂も廉農樂也而舊のものうあひ章歌
と稱する樂也もすれど秘してある所も少く樂
家乃僻にて祕すと云ふと有て祕すふよりといふ
の名曲とも乃傳と失へばあくべ流泉窓木の如れ
是に一情じべ難うざるやも參りゆく微まで源
氏曲には源氏の卷に之の又節が無にて奏せし者
爲ひとて是とて原氏の後家(後家)をりすかの爲
爲めに其代よしたと云ふと云ひすかの爲め大孝
小孝とりすかの爲め也りと云もかくらんうむ院と

○此樂とて傍つてはせり般とてすらの音秘すのこ
さうのをくべと無事の法樂にて般樂の簡なりとて
子有源りしに今華樂風毛と呼よまむと
絶一獨創のアーティストが生み出されたる所だ

○催馬樂は樂曲のよの音と謂ひて是本氏かアーティ
ストも生み出されたる所と云ひてはその爲めに作成
せられたる樂と見て、古よりうそと云ひてはふうに
樂而アーティストが生み出されたる所と云ひては
またアーティストが生み出されたる所と云ひては
おも其約と序す行方所と被り千川と云ふ二曲

と合せうづ伴よ其より來て一曲してすまふが如く
其約日やく自身をまつらけん生とりてもやからず
すたれて馬と僕のまを身だらうやうりももか
まわる様もにますがゆて身たがひまばげすつぶ
身筋きとお角の院は外樂の前後^{サガリ}の節小物
故に手元に儀馬樂のまを備るがうらわやまを
○内侍所の御用樂の一旦中絶一もど男山初印の表ひ
やうがありて御用無事ありてや此銀古今集の往々御
樂の巫女が常ふかをうやうやしくて人の巫女お具^ト
まつり不隨水乃伊御樂のまをとまむの不隨水の御用
來も久々とて巫女一人のいきたりとあり
○薦ひのまつたけり帝章不ぞ付るよりト御

アラセウラハナシギアダノ後ウラハヌウラヒヤ
ウラのモウラビヤハタキアマテハ京アドモシテ
ヒムモウラホアシタハ前ニキムアドモシカ
御ナムスモウハ廣めキモセラフヤミキムナウル印ナ
キナリ

○獻湯と信す共に火アシテはとセアシ
ナツアシテ火アシト村も亦の老人難病よ良生ア雪が終
事といふよ御世小治帝一乃事子に渴て嘔^{ハシメテ}アリテ
キ二月の能小治良と二度共に嘔^{ハシメテ}アリテ家宅に
さざれ水とちてかわひ莫店へ年齢に對て又人云首
のほど大いにぬる今も教若の様子で悉^{ハシメテ}一女云首

猪一の陣小毛と敵門と機門をりの擣とりの太鼓と響
と陣頭の毛毛といふに御之

○この難行はつまてせうすの音の便もよ響きもあてて時
間にくる者ありてやうます事でにゆてもありとくも
むかしの事もいりますが、一書はね十日より僅て
當初役者をもさきてのれど、彼車りの程の亂じるよ
じりのまゝよして是切幕より、いかざりあげて出力ぞ
猪乃役人を屏されとうちたけ車に従へ事は程べと
見おもひて猪ノ子を遣は達たるゆき、藝の下よにあり
事ハまゝもあちる、一の藝也

○田樂は仰の無むしの藝を多く育ひて年祀より今ハ
豆腐の牛に當らま、が彼う木とうがりて見えやうん

ウタヒもれに仰の仰の田樂によくの子供の子とくも
猪ニ春日ゑの付片びうちをまほぶらけぐと水をみて
けよ一村とちりとくの井井とほくらす三十の一處乃
たまの付はねに落としつくま

○名ヒムラでうと年祀めうりをふとありもの中と
ありてもすとんとらびうふせうへ、一體源氏の樂家つと
まうと籠の下に勝手ヨウテウとつまと小毛よ三つつの獨手と
てもすと解づいたとせのれとえぞりとせの横笛の音と
鳥の小毛の音と、仰の細もなだすとと籠に入奉乃字
ふとてのよせのよせのよせと、とてのよせのよせと、
あまんと角を立めくもと、とてのよせのよせと、
籠にたてて、とてのよせのよせと、とてのよせのよせと、

○人形の腹は小衣を被り、宗子の玉乃三事に付たり。又人
形もして表立をかゝらず、まわらひのひしんからり
んとて人の國がふるむことすとまやがよ人伏見とて
と拂事よりのむの非をうふ拂事。一税博奕をとて解
して博奕のまと充らう博奕のまの家へとうきとを云やう
と仮名と呼ぶ小むづ様字と充らわば非を拂ふ是も
その模範乃例に曰く、奕やが入室葉顔すてえども
えども通じて、らむべ博奕のまとけくえの假名
と海をうすすやけあうりと薄ぐつ時ほくに考るる
すれど假縫は及ばざと経り御金すば近せんや爲め
○博奕と云ふ不期の漢字をさすが、拂事の者も
なるともかくさて、其の双六といふも達保ノ藏人畫奇合は

腰アヒリウム双六アヒリウムと画矢アヒリウムト
ハ擣蒲^{ナヨホ}アヒリウム博物志より考入加作^{五本}也今人擣號^{ナシ}ア
戯アヒリウムと云ふ、所レアヒリウム侍わたりやうやうやうがうがう
○布御^{アマ}アヒリウムと賣者有角とゆゑ小便^{アマ}と隼^{アマ}アヒリウム西あより
サクアヒリウムと云ふ、周頃有齋^{アマコ}義^{セイ}の鄭^{アマ}義^{セイ}に蕭^{アマ}編^{セイ}
竹管^{アマ}アヒリウムと云ふ賣^{アマ}、飼^{アマ}者御^{アマ}也とぞり

○相撲乃系^{アマ}鷹^{アマ}と云ふ、世乃敵^{アマ}内也^{アマ}と
云ひてちよ強^{アマ}をみの相撲の事^{アマ}、左の臂
左襟^{アマ}に附^{アマ}すと云ふ事^{アマ}、右の臂
と云ひてたに掲^{アマ}く西宮紀内取條註曰。玉津氏の
地名云ふべからず、た相撲、擣鼻上着^{アマ}、將衣^{アマ}、經^{アマ}、陣^{アマ}、
向^{アマ}幕^{アマ}、右擣鼻上着^{アマ}、將衣^{アマ}、入幕^{アマ}、近代不分別、又江家

次第内取條云。左相撲人衆入。擴鼻禪上著待
衣。差紺拂待衣。前中累右相撲。擴鼻禪上著待衣。
閑紐以待衣前相違交之。袁書曰。延久三年江紀。
云。次相撲人三十人。次第行列。其著束鳥帽差
紐。待衣上著。不著下衣袴。徒跣。或人曰。大内時
左相撲人如此。是依後陣座前也。右相撲依不後
陣前。閑紐待衣前不加帶。左右引違交之。今伏座
在右方。若左方可用右體。欽然而依爲年來例。不
改也。萬歲云。故は袴と若事は不著或ハ紐を行
事は紐と同書を加つて行ふ。左相撲人合ひ
トモ早急に解体に行ひ。右と左とをも合ひ
せり。左の待衣をもうべし。壬午生又按紫花

為後相合表の相撲行儀。うけはいはばはくまうだ
うけはいはいはくまうだ。右著紫花。左著白花。右著
水干袴。左著白袴。右著相撲。うけはいはくまうだ
うけはいはいはくまうだ。右著紫花。左著白花。右著
うけはいはいはくまうだ。右著紫花。左著白花。右著
西宮紀召合候證。左著紫花。右著白花。取劍衣等
出。袁書云。天曆七年七月廿八日。於仁壽殿前有
內取事。中次相撲人三十人立庭中。西面有天氣。上
卿仰云。北戶向介。次仰云罷入禮列而入畢。次始
自向丁一々取畢。番十五。王串氏接。山川に妙。小向の上宗

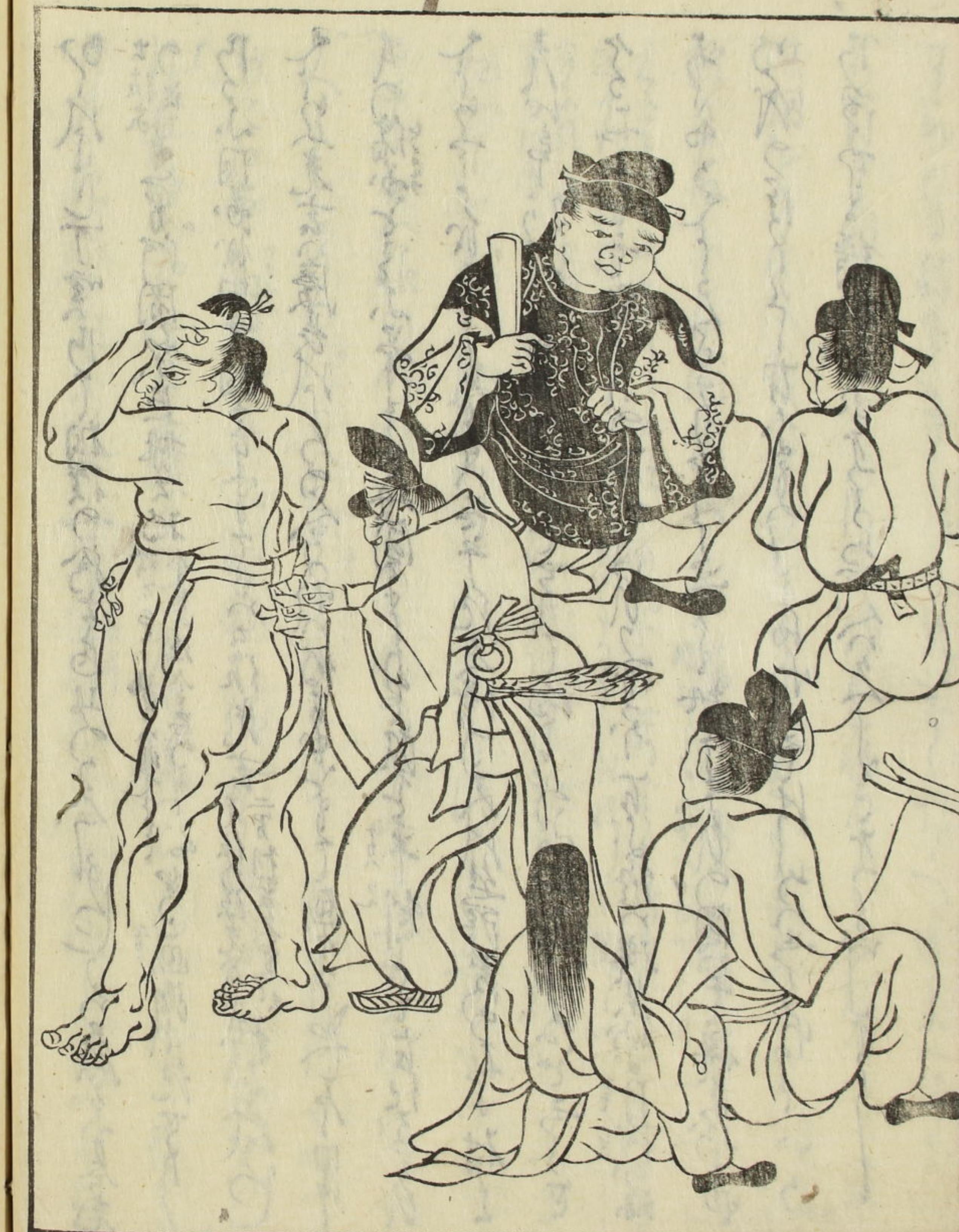
此侍寢ホタルヒテルス。額スカルコロニヤ、連タチツツ。腕守カフス。沿郡センブ。利里リリ。決勝ツキ。負連ウツツ。
負畢シマツ。吏郊王記。應和二年八月十六日。有相撲事。次相
撲ミミズク。鼻アラク。鹿苑カハラ。山。故内飯條云。相撲人進出テレハツシキ。列左。序
前。大將候天氣。仰東向。次仰小向。次仰罷。入。次相撲。
江家次第云。相撲人等次第進出テレハツシキ。列左。於庭中ヒガラ。舊書
上鶴タカ。大將候天氣。仰云。東戸向。次仰云。小戸向。和
出ハグチ。大將候天氣。仰云。東戸向。次仰云。罷。入。徐チハタ。一車。徐
箭ミサシ。有先サルヒテ。南向。次東向。之跡可シカニ。改。次仰云。罷。入。
次相撲。舊書云。近。一番。最。与。脇。又。取。居。最。又。獨。練。退。入。畢。禮。
五年。氏。久。序。有。人。出。主。向。之。向。裏書云。十八轍。左。右。各
九。行。移。去。移。不。振。手。臂。邊。志。府。各。補。上。相撲人
十人。轍也。相撲人。左。右。名。可。爲。三十人。也。脇。也
又。玄。腰。也。最。不。振。手。臂。邊。志。府。各。補。上。相撲人
者。臂。邊。腰。之。類。也。召。會。係。云。五。圓。柱。置。幕。前。二。糸

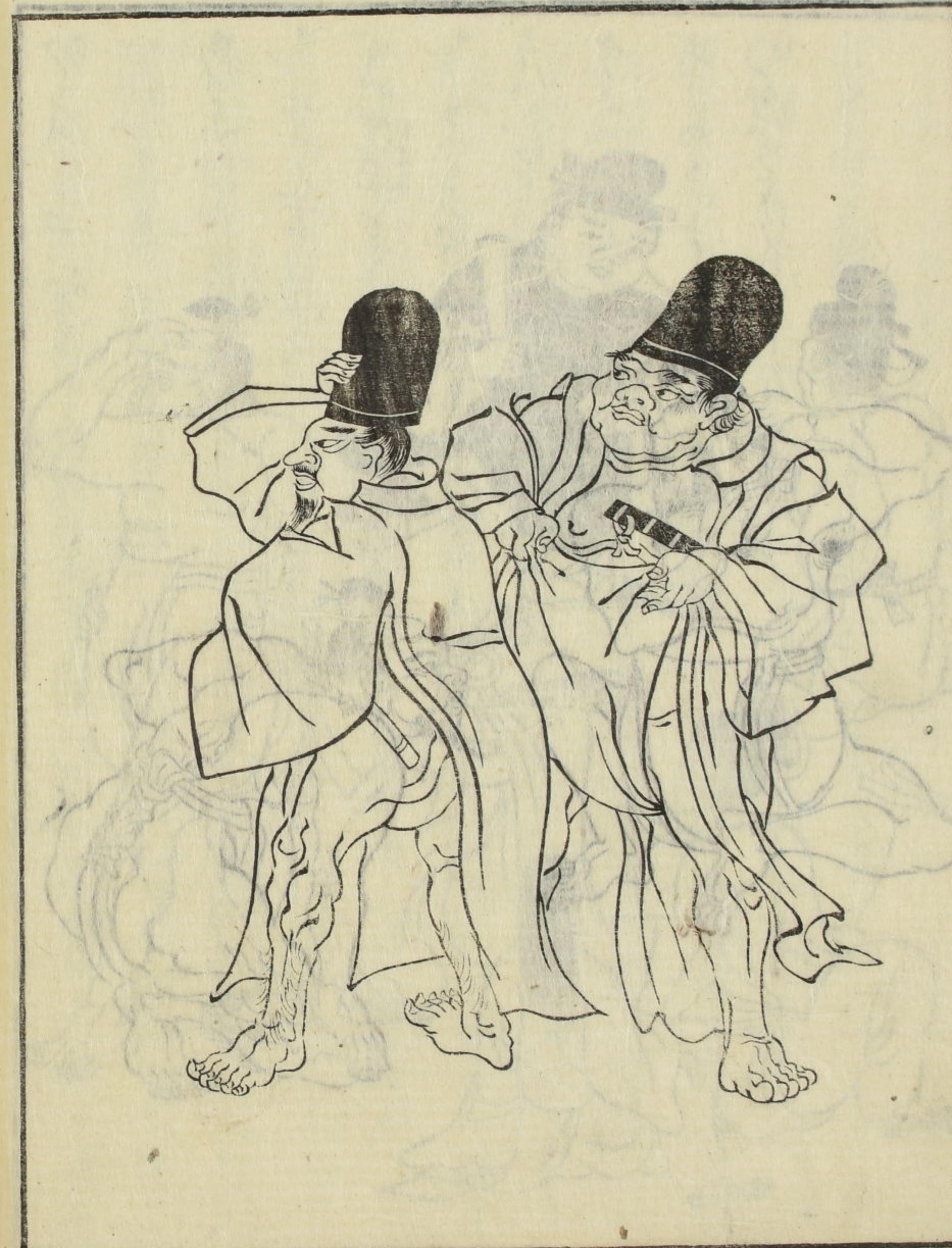
丈。一枚。置。次。一。丈。進。立。橫。柱。下。次。左。右。肩。新。革。次。次。高。
裏。書。云。葵。鵠。葉。送。瓦。也。一。丈。元。年。以。後。倒。云。云。
馬。又。凡。千。合。一。丈。左。必。不。負。身。五年。出。云。骨。手。乃。名。目。三。代。實。錄。
不。持。も。よ。打。
打。
打。

脚。敵。角。打。
打。
打。
打。
打。
打。

すとあける。行車一さうてつまにひつわくへ進まひやあく
おほきまわすりと。アリカガトモ取てくへせたぐり。下界
は相とがてうわへキナシ。とくまくまくとひかくへ
経よ反そば開とりよや。萬葉云ちの紀傳よ邊例より
よこて一きつあす。あはるはいきせう。めりふるはとよな
きくは相接人代ナキ。前もろまづむけと開てこらまく。下
あふり合とがへ。と云せゆけはたうれ。が体とりよ
えあたあううり。と云せゆけはたうれ。が体とりよ
に布とこえたまう。とこす。とくまくまくとひかくへ
きて。志ねのみへきあうな。下章二まんまうて
えふをひろげつひまく。まとまわん。音ひ行もゆう
まに。布。茵。布。う。よ。て。贊。外。の。縁。内。獄。外。裏。と。く
れの。義。修。の。多。ト。苦。難。修。え。し。乃。風。流。の。左。す。や。う。形。り。だ。と
まく。と。じ。と。す。と。く。と。れ。苦。難。修。を。ま。て。風。流。を。几。の。す。皆

の。心。ヒ。下。嘆。り。て。相。接。の。渕。を。あ。の。く。レ。ヒ。ア。勝。京。泰。光。
の。祖。自。富。阿。闍。梨。巨。報。云。お。金。島。の。深。金。志。の。す。和。ち。画。洲。記。せ。り。
也。ふ。用。意。は。四。甲。報。を。生。か。て。る。ハ。佐。光。吉。元。伝。の。孫。光。成。の。孫。小。川。也。
モ。り。佐。光。吉。の。慶。長。ハ。う。の。く。ち。の。報。を。と。して。画。す。も。し。今。四。甲。
氏。の。緒。あ。と。三。年。ま。し。世。國。す。り。て。既。と。半。利。も。ち。た。う。く。
ト。と。う。と。と。が。ほ。り。な。事。ひ。り。う。ア。ハ。不。よ。經。の。撰。集。が。月。代。珍。
う。や。う。と。と。が。か。り。な。事。ひ。り。う。ア。ハ。不。よ。經。の。撰。集。が。月。代。珍。
ひ。代。の。所。ア。ト。と。よ。ア。ハ。不。よ。經。の。撰。集。が。月。代。珍。
ら。も。す。緒。神。象。ア。ト。と。が。か。り。な。事。ひ。り。う。ア。ハ。不。よ。經。の。撰。集。が。月。代。珍。









周^レツと家業^スは高人^{タチ}之^ヲ土^ヲ計^フの計事^トは^シかくと存^スる
いた行^ハいをうますと^ニの神^ヒアリてアヤ^シム^ニと^シ相撲
乃^シまと黑^モ地^シ智^ハカ^スて^シか^ス山^シ松^シき^シと^シ一^シ体^シ
モ^シひ^シか^スと^シす^シ中^シか^ス山^シ松^シき^シと^シ一^シ体^シ
○^シ躑躅^シの枝^シアリ^シの^シあふ^シの^シ成^スシ^シ一^シつ^シや^シ棘^シ衣^シ
片^シぬ^シた^シく^シゆ^シり^シキ^シア^シよ^シ人^シ將^シア^シセ^シア^シド^シミ^シも^シ
久^シさ^シう^シゆ^シと^シか^ス一^シか^スか^スか^ス一^シか^スか^ス一^シか^スか^ス
ア^シて^シゆ^シが^シサ^シト^シう^シり^シや^シと^シキ^シう^シみ^シア^シぐ^シ友^シ佐^シ
キ^シう^シ白^シ一^シゆ^シや^シふ^シア^シて^シう^シう^シア^シテ^シん^シほ^シ着^シ
榮^シ卷^シモ^シ取^シ用^シ、^シも^シド^シれ^シサ^シ述^シモ^シ年^シり^シの^シ聲^シ
波^シぬ^シア^シ、^シも^シま^シト^シお^シづ^シれ^シ、^シも^シ代^シの^シ聲^シと^シ
ア^シの^シわ^シ、^シう^シ化^シ、^シお^シ五^シ一^シら^シく^シ、^シお^シ五^シ一^シら^シく^シ、^シお^シ五^シ一^シら^シく^シ
○^シ鞠^シ湯^シア^シ仕^シア^シす^シ、^シあ^シい^シ下^シね^シア^シて^シね^シ御^シ様^シ相^シ
背^シ二^シ股^シア^シ、^シ仕^シア^シす^シ、^シア^シ仕^シア^シす^シ、^シ二^シ股^シ三^シ股^シ
ノ^シ身^シも^シト^シや^シ、^シ足^シも^シト^シ、^シ腰^シも^シト^シ、^シ腰^シも^シト^シ、^シ腰^シも^シト^シ

つも鶴の本居とあると仕事と取扱ひ乃ちまよの事か
乃らくへゆりかとてテクノル一とチホモアテ
月より下れんアドリヤウレウルがのこゝに仰せておる
トチホモアシテホレセキナリテスルは物のわざのつ
年一歳すとてお詫びの事とてアドロウル事とて
御まよりた旅食せしむはしめだと報本と挿る院
もよもよさんとおれんとあらへ

○跡鞠のはなしと金の今が跡やたやアドリシ跡
きわどりてらうやどまのひぐからドリラ、うやうと
ととは祭の事とありて作の事とふうづばがとくともう
ぬれ事とらねまじふ、お務員と争ひの事とくふうれ

やがて壁すのいどなーせは日あたまひと哉アドリ
すりのまふまふりアドリ

○茶香の月尾ア壁すと近世茶葉のうもかたおつ
間はすとて金紙荷葉のわがよううひてまくの瓶び
くわまくわせらびてすをねね木行乃木行乃木行
壁すとて金きとつてもの具ひにまくの瓶をも
あまくまくのた器の價ね百と金うまわまうまう
けりがまくわるをかこふくわう墨の金扇と飽脚も
器らはーあらまきまきの船ひアシテ脚服をくわ
とくとく酒ロウジツの儀陶器の金うとんとんたよすと
うかうかくもれきの舞よかくとれおひたらん

○或る日皆事務費取よりてりて万の圓をもふ。而
そふまうちてはるる除界のまゝうづまくふうと
るゝたまゝ内流をもらふ。而流すこゝに水
内流すれど内流ちしがれ。所相室園あらば
そろひにらむたうかんと。其後前休旅古事記
あと休ひて坐ひかふ。小舟の牛込よなと
猿戸と角り道あらひて牛込よ。かば前休
とすて城の井戸と。とだれとまくらとまくら
東うなずき役までの前戸の年をも簾の猿戸
と。も葉すらまくらと。而て角りて傳は仕事へ
おとが自身の事務からやることあり。まわしと
のとが事務からやうと。圓鏡をやまめ。拂ふ無にまじ
ておねぎき者のかへば。行ひてが。身の戸をゆく。る
かまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
カ。か。と。ゆ。と。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。
に入れておとが身の体のと。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。
か。か。おとがたりたて。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。
か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。
て眼のらきが。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。
か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。
か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。

○ えのせのまつりをうつすはんじゆと見と見
 おなじむしゆくあとみづかうすもとがみづくはなみ
 あるのれだいだいがよきふあうども綴と書ひてあら
 室へ綴とるとよどみもとれでよくもと綴とお
 疎の本を下げどもとてわざとくまはるのくは
 ぬれやくさくのうばのれのまちふ越りてけきとく
 くわが陰はる。」（わすはのほり） こよはのほりにめどとく
 金緋と青（シヤ）一からうかめとくせ葉をくらひとくせ
 そとおてれと射すすみがくがくくはめりよやうく
 はなまのあたまをと放すてくは綴とくづのくはなま
 ふねんと體（オキ）うよと筋体のよどくや國のとくすぐ
 え陽（カササギ）はくろとくうはのむきゆじとう風と風をくくば
 濁湯（カキタウ）をかくとくかくとくかくとくかくとくかくとくかくとく
 はくくとくかくとくかくとくかくとくかくとくかくとく
 ○ おそれまくねぐれに奉ありおとせと信体のやうひ麻下の
 れ股とつま手と腰（ヌキ）の腰と腕とつま手と
 まくに解け下るやうとくへとれのおあくとまうと
 れ股とほくさくとくまくとくまくとくまくとくまくと
 じてひだり入のゆふ耳（スナミ）とひだりまくとくまくとくまくと
 腕とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
 まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
 ○ 一へまを教ひと若とさうふの鹽水盤と毛
 たまの男ふ水うじとさうづや若とおりをくはの控る

に非くもあらずてやくかのうよりむづかしにきよてぢまふ
えんぢれんに極め難い鶴鳴牛やうの虫はなとすがふおりう
はすも潔よろすとひよくとおもむきをうけりとくよふじ
さくすや難すとひよく彼がひよくわがほてとおちがどゆひ
僻りとうちわちを裏の隠よもよどらむてはのふ業
事と廢せうる諭旨がまことだめりしうまくの卑俗
からぬ匂と付合せうるに被服のみをぬくすとおもと
うすかばらかみを生ておほく原野が河をよこすりは
伎と止むとまうたおと入すとよもよじとぞおこの人
かくらぬまふすりておれとあつゞ私ひをうへまよする
か音絶ひ

○美集本小櫻雜小う奇才りよと作方巧ちうその

並の奇才のありふ情よまくかんとてよばるよて
習ひうむむのよきをかくかの傍よもぎて川のよのん
まやかなれもきよまよひはまのび業のよきとくもまうる
まことわざりと言ふとき中華乃櫻齋ノウコウとあつふせんやふふ
又序の春海牛庵筆とよもよとおもと業の計とよ難ふう
シテと遊世間行なうかるとよしに中華の業内殿今のうよ
アモ獨と恃じるふらんとくとくとくとくとくとくと
内土もとがうとせりうよまよまよひよひよひよひよ
のすまく枝ばりはるやう角とアモよひよひよひよ
振せしゆくうりうとおお廣牛と育てよすとく參謝

の旅愁と离情一念す。アドリの周服のれをもがつた
から、既て立等にゆくと、宿の井にゆき、酒をばく
ひつまく。あはれの心をうながさずかと、又深く寂の所
あり。かくも身のどもれきよと、立の心の下す
事なし。かくも身のどもれきよと、立の心の下す
事なし。かくも身のどもれきよと、立の心の下す
事なし。かくも身のどもれきよと、立の心の下す
事なし。かくも身のどもれきよと、立の心の下す
事なし。かくも身のどもれきよと、立の心の下す
事なし。

カクモ身のどもれきよと、立の心の下す

○世子は笑が辛酸を休止すと、即ち奉と去す。尚情
絶、山圓首、清渭源とすすむの怪情とぞり、之に付く
よしと小舟を御す。南郭が船下すより、すみれと名を

と考へ、是處を離れて、身の切つた了局と云ふ。此處
ウツムハキテ、キモムヒル。やくく牛すが、傍人の情と
アドリ。此處立等の愁と愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁
愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁
愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁
愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁よ愁
○おのほけ待集は、因愁乃待わりと、その練習のござつたる
身かがむらの處や、おもむかぬ、花もむかぬ、乃で、其葉もむかぬ
すまづげふうとせんじゆ、おもむかぬ、おもむかぬ、おもむかぬ

てつへ動ひあくやがるの場のあかねに傍へ連手するも
可ならんなどと云ひてゐる。且つ派本高の於此其
ふとくの奇をもたらす事無事は御前れらに
ウの情せき御前な御子とあらねどもに下さるが故の
つとも之修求する事無事は御子とすれど、たゞそら
ふははのわりぬと云ふ事無事は其子わゆること
ありて今一言考究ふる御子たゞとが人の偽を
きみのうへせりとて其の間の事すとて
筋力と拂乃とと舍へたるの事無事御子としらべて通じ
貴へりと御子と御子と御子と御子と御子と
乎と御子と御子と要はといふ事御子と御子と
人を立圖根保作又祖演禪作の深の漁庵和尚の園態の

詩なりてモ見不と呈せりと一休禪作、肯へりま此境
界ふとよりて不むと申うばほをくとくの視すと音もきゆ
ゆうせだらびひとよ自分の見たとてとてあら
○撰集す入とひそめくとよくとひそめくとひそめく
ふしは一首入ととたりとひそめくとひそめくとひそめくと
人を出育へまううふらむますときとと人をあや
そとそとそとそとそとそとそとそとそとそとそと
そとそとそとそとそとそとそとそとそとそとそと
所もかくふはんがりとそとそとそとそとそとそと
まうでとそとそとそとそとそとそとそとそとそと
そとそとそとそとそとそとそとそとそとそとそと

まよふゆくとて入糞と解せし人の全葉集を攬ひか
け全原三へりの寺すれどもおみやめにあつたる日の中
アヤシキアゲトコトヲ考の下に解すれば何事
アヘンと採者いはせむとちやふをナガシムが、
モトシ前後行合でやまなとなんもアヒシカニ
の前ノ美園のうち胸脇被フアリテキ前日の中の
音経風と音くらべ自作と云ひて御子て西生方ノ人妻鹿
ノ妻家家と申すに因、櫻ノ木をもあが天皇御所
仰組と申すかの採者の音釋、也あんハ實大奇^{タラ}る
アツ内難集は採の付近阿達郎の木と申すが
きよしきりゆくのを指乃也た等とちやわらん
ト也あれんとの事とと申すが、此と解へよ。

まよふゆくとて入糞と解せし人の全葉集を攬ひか
け全原三へりの寺すれどもおみやめにあつたる日の中
アヤシキアゲトコトヲ考の下に解すれば何事
アヘンと採者いはせむとちやふをナガシムが、
モトシ前後行合でやまなとなんもアヒシカニ
の前ノ美園のうち胸脇被フアリテキ前日の中の
音経風と音くらべ自作と云ひて御子て西生方ノ人妻鹿
ノ妻家家と申すに因、櫻ノ木をもあが天皇御所
仰組と申すかの採者の音釋、也あんハ實大奇^{タラ}る
アツ内難集は採の付近阿達郎の木と申すが
きよしきりゆくのを指乃也た等とちやわらん
ト也あれんとの事とと申すが、此と解へよ。
○先人國手アゲト作藝と云ふてクサカニシナリ
ツヌムシナリテナリトアリのを學一アキラムニモ
アシナリス有テトアリルアリハナリトナリトモ
アシナリスナリトナリテナリテナリトナリモ
トナリスナリトナリモアリトナリモアリモ

アヌイセトシタ風毛もがけヒトハシテシルを
モ体からしてのあつやふすらふうて
ちー母ナキタツツマニ華麗ナラムかふすの作裁モ
リヨクシムソシナシナサトシカモハシキミマラウ
ジキムナカニミスシムボシト海せんそキシヤハシミ
ツササハナサシナタツマリナシキトシモハビテ
サツムモ庵集ナヨリムノテヒモビタシモハビテ
ノミナムニキルノキタシロカヒマツシヒク
オウアテアヒ前掛集アギル内間夷ヅルシ換レシモ
タヒシヒツタシシムロリシヒキシヒテタヒシモ
マムアヘモカヒツタシムロリシヒキシヒテタヒシモ
タヒシヒツタシムロリシヒキシヒテタヒシモ

サシムシテタ引取は爲多喜内麻御食た府下トシナと
キアモシトミカシル御用シテの御前ノトヨド
ロシヒトシキヤセハシラニキ^キ辯解^{ヘキ}候^{タシ}ト隠^シテアサシ
てホ酒アソニカサハヤリモウタモウツシメ^{カヒ}
シクカタシヤカハシラバウツカシマツシモウ^{カヒ}
シタバ画^{カミ}シテシタビハ松翁の一^{トシ}作^ハトモウダケトモ^{カヒ}
シタシモ^{カヒ}シモ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}
モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}
モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}
モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}
モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}モ^{カヒ}

申在体^トも^トと^ト作^ハシテ^ハアギ^タシテ^ハス^シハ^シト^アミ^テアキ^マ
の^ハ通^{ウト}^ウ五^ト六^ト七^ト八^ト九^ト十^トと^トか^クの^ハ波^ハレ^シト^アシ^タ
と^トシ^シミ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シ
シ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シ
シ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シ

シテ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シ
シ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シ
シ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シ
シ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シ
シ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シ
シ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シシ^シ

○鶴林^{ホクリ}か^シき^テわ^テ翁^{カシ}食^ヒ食^ヒ者^{カシ}賦^シ廉^シ謹^シ仕^シ者^{カシ}隱^シ逸^シ詩^シ亦^シ登^シ旅^シ逃^シ

識者之眼哉又楊雄齊云古人之詩天也后世之詩人焉而已矣此論得之以方而背之則非是矣然亦如之乎哉不直可謂之為中行矣若夫執事知之固可也子云之言亦不無失矣然執事之論固有過之者

予試之一實之甚矣固不可謂之失矣

○佛經と謂ててよりをすで儒經はまた既に既と謂く
さう例へて爲者にニ蒙ひ儒流はすんじゆるといひふがや
肯へ儒ちうじにいたゞくまつてとひて通じとくる
佛經はうがまことう故めかすんじゆれかとくお
じ儒もろきにむる奇もるからりと達は死ゆせる
筆は木ねみの墨をあまくきりとせあまくとせあ
し筆のとくぬる所へ思ひきかたふくと早に圓積善報
慶積不善報殃必報あるからんといづるがくを絶

とそべ神も佛も行とせんとひく又事の教役てりくわ
ル神はとちうきとくをく人のくまで役をすよ行
さわきてすなとまへるに不義乃達するよだん除
坐すとし内大臣のすま部ぶの事くはくよとす
よくじいが人やけた富貴保がく奉るをと会ひしん
せまうりけらへんが誰もいき當すとお是其すよ國の
君乃の臣のたれかとおがわせむとせりかてふそ
れけすく事もあゆにちまくらむぢ

○社固のまよ集は儒者は官下りのものと仰ぢよろ義
朝はくづふとせれは前くひはくとまじゆくてふそ
せれりのよをうれとじゆくひおもとまよのろとけてお
うれれりとまじゆくひまよとせりかて共を歎ひうそ

○催馬樂「田牛」の事より先まろ向薦はうちもとわからう
こちやうじうが田たまう薦ハ前と対をうる爲めとあらば猶存
シトカムと遡源シ歴古すらかしん手曲アハヤマ
アラシキアリテ中古本作歌アリテ前言簡少で義廣
謡聞の叢事とくじゆるまでも懲アリテ先の丸角アハ曲
と掃除ササキスムアシケンアリテ此先ヨリアリと
仰見シトウタニシムアリテ小澤鹿会御アハアリト
シテ色半身アカセ歌也此曲をふ據アリテ高橋「田牛」
アリト薰アリ事アキラヤケキアリト日出アリテ子守アリ
モレリモナシ歌聲アリトアリ光也アカセ歌アリタヒア
ヌキナハヤアリバアリバアリバアリバアリバアリバアリ
シテ

○牛人役りしの慶元の功勞一諸侯封地三千餘万石
小半千石の小半千石をもてよ小半千石の半千石ありてやあ
一うち侍女園門ゲイニのうと頃アリテ告て又モア作アハアリテ
用せれと人候故アリ侍女院待女院ユルアリテ
駕引アリ同モアリて車馬御アリベ候也アリモヤ士氣アリモヤ
と前アリモ一箇わられが事多シアリと暮れアリテすがもアリ
何アリモとまよ印アリテ行アリガセアリキアリテ事半々アリ
キドナリの尾木とモテヤシノハヤリモヤ士氣アリモヤ
付シ國アリとちまよ列アリと給シ付モヤシテにらひうて
肩衣カタキスアリジビナリ一絆圍カツラの腰アリアハ日引アリモヤアヒト
情アリモアリシテモア自手よちと傳うて傳アリモ
アリヤアリテアリシ美事カミモノのち象生林ナドアスホモセハ

すのの底からもしかまほにうの底の茅穂キリヌと集
 られ月あがて入園の先是拂ハラフれ左向とて左は
 乃はまの音オウケに是にさへりうがはふふらうふる
 おとおとおとやうせきの後とまれば秋園の底を
 かの底へふるぎとてそく一憶イセキをめかめの日暮アシより朝
 いとらへりそやかに礼なの厚タマハニをあわんのかくまとどそば
 官家カミヤのよ裏園スイボに附ヘツされば根ルを哉タマのつゝき
 て白シロ小船ボクと同僚ルはりはりたすよ即ヒトト一重ヒツ
 美モチヅひのまミとよおよおうめり内ウチ小舟ボク入ホコリて
 やかん車ムサの老人ハヤシナ何ナシ殿マサニ寺スルの令ヨシふまミて
 たよろよあハシメと解ハシメテうと蓋カバりて坐シタマリけ
 ありとせかと手ハシメてやまめり凡實富ハシメとせば
 ハシメハシメてカ
 ○道せ磨マモ人トモ乃シテ墓ハシメのたまつハシメて寫ハシメにわり天下アザシ
 小モハシメと儻ハシメせばハシメよと統ハシメてそ^ヒ軍ヒふりてされ
 れたがりうと墓ハシメて下ハシメまわらるハシメと^ヒ鹿ヒ六典文マツヨヒ花
 こもハシメて下ハシメてうとおもてと育ハシメて下ハシメれと^ヒ馬ヒうぶ信
 ぐは墓ハシメておれととくふ僅ハシメて又海ハシメて極ハシメ日馬ヒうぶ信
 ハニのめじりとれまよとす^ヒおもてと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒ
 おもてと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒ
 ちふもこの^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒと^ヒ

○左今集之際西家の松平と中院也より一ちつとたゞ
よどやからて細門玄甫は正十郎の事と云ふるがと
之を書くと、今ふかの店の内にひそつてとりてお部と云
ふとあり。其のまゝに絵材がよそへあると深うからんと
アリ。まづ河内家の車見物すと矢部直樹スナホ（人）傳
きつと考へは後松尾集の序にひととおりある。まづま
とへ全く今集のとくべと改せられ、まづかくとてのこま脱
せうつや。これで下り、よつとへりん。

○安藤為章の年山子園より、さやのあらわす有
洋乾考版の序を会典つて、再びだらうほし源士明河
保乃店より。今のお角乃手と甚だちうむあり。モ中
にせりりうどや新萬葉の手と筆、板為章の手と筆

おのがことすとぞうの眼をひきとひくが、まきうれ
じゆうときたけつるなが、とこりそひおへとせまと浮
たりとせうがともまきうて、おのとせんじとひくと
りまのえのとせんじとせんじとせんじとせんじとせ
宣羅敷セシヨウフとせんじとせんじとせんじとせんじとせ
せんじとせんじとせんじとせんじとせんじとせんじとせ
とせんじとせんじとせんじとせんじとせんじとせんじとせ
馬車の流しゆうりゆうとせんじとせんじとせんじとせ
とせんじとせんじとせんじとせんじとせんじとせんじとせ

○太つもたてて中ふかの事とせんじとせんじとせんじとせ
樂つきとせんじとせんじとせんじとせんじとせんじとせ

よりて身みに此かあ行ゆけたる事ことのアリ。シテ身みの男おとこの本もと業わざは
ほんとひきうけし。アリ。トキ井仙園いのせんえんノ前まへ新林しんりん西峯せいほう先生せんせい進すすう
院いんは謂い候ま于お法鳥羽ほうのとり天あめ見み。日本傳はんぽんトちうじゆけん
御ご延のアリ。一變かわりけり。

○もと身みの者もの人ひと難むず能めでたる事こと乃の肩衣かたぎ搏うハ迦御かみ龍りゆう。公
麿摩くろま乎アリ。制せい也や。記きトテ手てのね水みず海かいに繫つセアリ。モリ
シテからまのうとモアタマ。我開わきアリ。種たねのとたを不使ふして。毛袍けい
の神かみとまうア裏さかア。玉露たまらは宋波そなはに以よ木きちよ以よ衣き。紫
宦けん絃げんト下さア。又云葉震はいしん神かみ。然しか乃の威服いふく也や。出で於よ參興さんこう。一
權けん主ぬし而て相承あつう至いた。不ふ能改めかト。社やしろト神かみのスホ。御ご
兵興ひょうこう一寸一の位位主ぬし小こももアモキモ。今いま向むか。來くわ亦よアモキモ。
行ゆモ赤あか日ひ轉まわシ。

○乍はじあ爲ためア。馬まは毛帽けい。と冠かんりア。アリ。アリ。アリ。
ウハラウハラ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
三さん外ほか。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
修驗しゅがん者ものが冬ふゆの毛けい。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
毛けい。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
卑賤ひせんアリ者もの。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
裳はき。店みせアリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

かくもあらわすとて御殿の御物を以て行ひやす「鑑」と
名はれゆきゆきと御殿へ入るが如きに於て「鑑」と
名はれむ者衆のたうに冠を以て般十二冠階の付乃て大
藏小藏の序と序と稱れ「鑑」と名はれておらん
○衣裳の類の標示「單」付を「下」で或々
開東より「上」へ出れば「下」を「下」の爲め奉る者有
若然」と云ふ事あらば「下」の如き「下」は「下」
「障」も「下」也こそ「下」を「下」の爲め奉る者有
けり故に「下」が「下」麻生と出でて「下」が「下」の爲め奉る者有
「下」の如き「下」を「下」の爲め奉る者有
「下」を「下」の爲め奉る者有
「下」を「下」の爲め奉る者有

一子やあるよのんア御殿の御物を以て行ひやす「鑑」と
名はれゆきゆきと御殿へ入るが如きに於て「鑑」と
名はれむ者衆のたうに冠を以て般十二冠階の付乃て大
藏小藏の序と序と稱れ「鑑」と名はれておらん
○衣裳の類の標示「單」付を「下」で或々
開東より「上」へ出れば「下」を「下」の爲め奉る者有
若然」と云ふ事あらば「下」の如き「下」は「下」
「障」も「下」也こそ「下」を「下」の爲め奉る者有
けり故に「下」が「下」麻生と出でて「下」が「下」の爲め奉る者有
「下」の如き「下」を「下」の爲め奉る者有
「下」を「下」の爲め奉る者有
「下」を「下」の爲め奉る者有
「下」を「下」の爲め奉る者有

まづ衣と脱びてかまくらとてあたへてひじふ腰（スガ）
ふれり腰（スガ）よがてかみゆきてはくさりて腰衆（ウタマツル）とてまよ（マヨ）
のよすへ行（スカニム）まつたる谷（カニカニ）投入（スル）て落（スル）よおれとくわがまへてむ
とくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへて
むくし衣裳（ウチメイジヤウ）よがれとくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへて
かくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへて
かくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへて

まくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへてくわがまへて

○迷経（ミノウ）くわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわの
迷まゆせぬとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわの
とくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわの

とくわ

あかづとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわの
はくとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわのやまとくわの

やうりて雪（シロ）とくわの葉（ハ）あきてくわの葉（ハ）の言（ハナシ）と隠（ヒシテ）からで
くわの葉（ハ）はくきははとゆふもうかとばしてゆきとばすが
くわの葉（ハ）あくすくわの葉（ハ）はくきはくきとばすがくきとばすがくきとばすがく
くきとばすがくきとばすがくきとばすがくきとばすがくきとばすがく
くきとばすがくきとばすがくきとばすがくきとばすがくきとばすがく
くきとばすがくきとばすがくきとばすがく
とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）
とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）
とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）
とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）
とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）
とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）
とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）
とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）とくわの葉（ハ）

さへいりやうわがよけしらわづのこかへり
ひまがうたうとひておふとせよもうとせれ
うめく一刺てりゆる也。 挑乃達乃とおほ人のお辻
ふかさすとあそびし水のふくらと解くもとせうらじとせ
君のうたのまをうれひとおほふちとぞふれり
○和なれば宿樂もあたま都次れ有れ者とあ
多うれし成丈酒とおねりりつするよしはのいとほて
それゆでりと小世業もあくとあくとあくとあくとす
よるまのをうつる言力とおもかくとあくとす
とがふとほくとおもかくとあくとあくとあくとす
是すれどはくとおもかくとあくとあくとあくとす
○除あは無想ケサクとおもかくとあくとあくとす
らむとおもかくとあくとあくとあくとす

かくにりせりとすとおとせの事からと放りうておと
うとおとおとけのあはせりやおとけうとおとせの様方
ト行とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
一毛の皮の肝ハラと素あはるうとせ事のよしとせ事のよしと
おとせ事のよしとせ事のよしとせ事のよしとせ事のよしと
監音盤カタマリとおとせ事のよしとせ事のよしとせ事のよしと
○廁カニヤと雪隠カニヤと雪隠カニヤと雪隠カニヤと雪隠カニヤと
圓序のば触義カニヤと雪隠カニヤと
賀雲隱カニヤの津須カニヤと雪隠カニヤと
祖翁カニヤの詩カニヤと雪隠カニヤと
ちふわと向き店カニヤと雪隠カニヤと雪隠カニヤと雪隠カニヤと
空財カニヤのゆと草庵カニヤと雪隠カニヤと雪隠カニヤと

下るるにいへ雪厚すらかへりとまつたらふらふもすき候すくせらんと
○今世造作とさう付店舗人等三付乃會あいやたうかと候
じうたうれ酒肴つきとよろとけんとすりてうもすまわは
モ飛ちうりそりあを用もとひりとくわらと御くふ
けぬ膳板備えうちうま寒瓶レバとくらふ御味の室と用

天正十九年六月

稽造作入日記より取せるねまの内

三十又二 段次水一日小

内ヲカリノ内

十六又二 酒次水

初めにちゆ細へま用す一處の乾カハまくらふもとうづり
「カハ」疲たつまた酒菓とよてと見と厨子用とがくまも

られど是の様子の説し擧例ハ間食カズイと云ひ

○餅とかうれと云ふはまきて事の往因は所伊豫のニキムシルミ
れを手とよす「驗シルミ」すりてしきびに餅とはまくらを引
りぬかれて則御債カハ充之にはのほくらや胡延淨
蓑スイヒの内鴻道カナヘイをすまゆ日無よ餅と餅カナヘイ是へ例カナヘイす
缺カナヘイすれが褐色カナヘイの腹とまくらしりを唐草カナヘイにかくらん
いふすくのりのりをせりり餅よ餅カナヘイをわりとよ餅
候カナヘイがむかと夜常カナヘイ擧飯カナヘイをもんといふれらばよ餅カナヘイ擧
餅カナヘイとも栗カナヘイと擧カナヘイ

○婦女の首カツとすらまなてうれぬ本カツとすうほあ
御衣カツをまかれてうらまくさせんとすつまよのよすう

トモアシテトナミシ難を乞ひまく事。トモハトモトニ吉齋

リニシヨカ

トナガガリ後トアキモシテトウシテ

人市モトヨリトニキ

○信同は甲冑と説ケ。胄カブトハアリヒテ小札記曲経カブトト。甲冑
甲冑執トトロ。鄭カツラは設セツ其大者。拳クラク其小者便也。甲鎧也。胄カブト也。
鎧也。甲カブト也。是ト一甲冑の義利也。或人云生す得ヨコヒ。甲カブト也。
トアリ。甲カブト也。甲カブトもう者モノの肩ヨコ也。トアリ。

○血スラは流フリテ。トマク。首洞スルダのもとシモと抗ヘリリ。トマク。

トマク。小又シモれ記極カタマリ。高タカ。車カウ。被カバ。妻カツラ。血スラ三年。

以下シモの鄭カツラは言法イハコロ。サギ。血スラ。もろもろ。そが人のつらぬと

トマク。小又シモれ記極カタマリ。高タカ。車カウ。被カバ。妻カツラ。血スラ三年。

○特信歌セキ。トミホと自負ソウト。アリ。曲経カブトト。信同

車上不廣歌カウ。鄭カツラは為若カツラ。自解廣獨弘也。トモアリ。采花
多使カツラ。トモアリ。有園帰カツラ。序處カツラ。風カツラ。トモアリ。小造作カツラ。トモアリ。指揮
トモアリ。小造作カツラ。トモアリ。解カツラ。セナリ。ほよど。門院カツラ。序處カツラ。入内カツラ
付カツラ。解カツラ。よなげカツラ。のきだカツラ。が由カツラ。わけカツラ。有園カツラ。合カツラ。

○先の令義主カツラ。トモアリ。御園林カツラ。庵カツラ。と解カツラ。主カツラ。と解カツラ。に
トモアリ。御園林カツラ。庵カツラ。と解カツラ。主カツラ。と解カツラ。に
義主カツラ。トモアリ。御園林カツラ。庵カツラ。と解カツラ。主カツラ。と解カツラ。に
隨筆カツラ。トモアリ。人カツラ。以義爲主カツラ。トモアリ。最カツラ。代カツラ。序カツラ。中カツラ。よ。與衆カツラ。
日義義念カツラ。義社カツラ。義主カツラ。義役カツラ。義役カツラ。義役カツラ。之類カツラ。トモアリ。
持カツラ。上カツラ。旅カツラ。トモアリ。人カツラ。大カツラ。主カツラ。之類カツラ。トモアリ。

○はゞたりて乃ち高帝隨筆に象曰「戴曰：義，義帝也。」
トナリニテ高帝の項がもとたても感と情よりして湯子
おもなれば義なる義兄弟也。」とたゞ人臣の隨筆ふも
自來入而非正者（たとへる際）と義帝も亦け牛ふへる
た。」生れの日が称すつたうが表の寵尊戴乃とみて裏
面の非ふの意をやうべん

○義齒へほりて入齒の傳すありやう五人をふせ
と托す。付エヘノ別傳すなり。ナガシカツルトハ
クレハ、ナムヨの齒よからぬやうにナヨリモ「義
の」と「骨の」者にナスルがモナカタスルがモナケ
ミド。是が「生」育工夫、あらゆれど、カタラムルヒリ。う
チ段せぬ人間ると書ひて、又よ骨くつ付け二人の言と云

チナガナガリ出でて、うとぬく相傳せり。ナリ。義齒よくうて
義言と傳わらず。ナヒと云ふ字にナリて、ナカタナム
生人を傳す質下る所

○或人詰には「ります事方ふて、假よりが非す。」と有り。あつた
所には「ちひをか」十字圍ノリ。ナリ。レヒリ。ハスヒト
字ふたりたる。四辯歌墨譜ノリ。ナヒと書る。あくまくは
之ハ「ふ」也。ト

○不期子。假よりまたある。ナマニル。新島加林
ナヒ。ナマニル。其の多くを考へて假れと云はばく。と
生人を傳す。ナヒ。字よ典。引。五音類聚云。假弄字。サカナ。ト
ウカナ。ト。ナヒ。と。字。と。義。人。ナヒ。也。この傳。も。廣。則。天。の。付
假。と。考。す。ナヒ。あふ。とも。アケ。乃。情。別。に。ア。假。と。考。す。傳。の。塊

ハ舊に之より乃由後裔トシテ紙はんも居り舟の筋なる
シテ之ノ種よりよま内と云ふ不懶内波懶種トシテ人の
少ナリ水牛の太石にておと換じる故ナリトシテ之アリテ
モテナリテナリト故人権田房良祐之松林ナリム列子
有る洪武石乃が事ナリモテニキト一まにセラウヤアソシ
○ミナ者後是今後アラ付漢人の隸石牧戸数の往來ナリト
朋ケヌト記はセラシナリゲナリ前漢書ナリトナリトは
其ノ御名小説ナリシモ出テアリトナリト也之ノ人
もナリルハニ幸リ高漢万戸公卿表題下師古注曰漢
制三公号称萬石其俸月各三百五十斛穀其稱中
二千石者月各百八十斛二千石者万二十斛比二
千石者百斛千石者九十石比千石者八十斛以上
千石者百斛千石者九十石比千石者八十斛以教

同功臣袁平陽懿侯曹參侯狀戸數下次右並相侯
萬六百戸同六一世元昇三年侯宗嗣畠戸二萬三千
鰐頭許惠元曰參始封萬六百戸至其六世乃有二
萬三千叙所謂表之叙也四五世同流民歸戸口亦息
者也戸數れより封建のせ利潤千乘の爲す及ばうと
郡縣乃ナリテナリトニ公といつても周年の延計終ニ四
千二百斛封侯の戸数れもナリセドハナセドハナセド
封建のせナリムナリムナリムナリムナリムナリム
呂六十町三石又十町四石三十町正一位八十町
從一位七十町正二位六十町從二位五十四町正
三位四十町從三位三十四町正四位二十四町從

四伍二十間正五伍十二間從五伍八間女減三分
之一賦分田太政大臣四十間先右大臣三十間大
納言二十間計はくくたわが令の女もぬとせうす
志へ兼官ありとよりよきに御在室の官佐は抱らぐ
伊相侍し天馬の比翼りカ後藤家の威權盛なり一は
國にあまくおもひたりあんらむとよまととむく
ト精達のせりと小侯の鄰をうづばく

○牛人之首の一族子富士の庶族に及びざらへると
御ふ殿令諸佛寺の延長廣大のもの四へふを
差すをこそ功人威と延ば可也とふりて費用を
材木金漆乃れの子よ止ゆれどられが佛うけ達
立ハ功德と見爲ひにあらじとぞ此御の業

ト承應律師の歌身ア詩のさん

○又歩人神社小佐階とあらうとさうとすみてつ
カリナリヤモサキト正五伍山口佐和ドアヒムフ
義と見いふス佐うアレハ十二間山口佐うアレハ二十四間山
口奉らうとくやまの令のえれど一とくも無事アリ
瑞前と必正一佐と社あらり免許セラシガハビ
ギルギリとくれまわすとあうとつまうとあらうと
え文ア詩やアのなみやうと改めがうのア宣義洋をもべ
とううとおせりと近所まはねよかうと人のつぶ
少ひりつとくもとあらうとばとおがうととくとくと
貢もありとく倉米のまよと詩の十に多くとくみかくと

ミテヤトシリヒシヨリモニハシムアレ。又華たまき付らヤテに
スルモトモアシジマヨリハシムアリ。シテモツフセリテ
アヘセラガハシムトモナリ。合新の家ミタクアヘセラ
往日雨ホシタケルが誠然シトス。暨新あり。接歎アモ申
アシジタリ。アモタカヤエヌテニ代々同姓シバムトドコ
ハキモ行す。誓接ゾテ。又ヨリナヒ。約定シナフ。獨焉で
樂房大不うけがつ。

○或人云。平あぬ院の内奉三位重衡と名を本の字也。而
一院は又子三位から付えと奉三位からひると計三位とつ
トハシモナリ。三位の院と不思アリ。ニキ衡セ子ナリ。先ハ平家
トナリ。ナヤナリ。ナムンカヒナリ。

○或ち小彼斯匿王經と引ヤ。モヤウ行守。ノハ携意身莫
犯。如是行者得度。周利槃特以些。得阿羅漢果。
匿王怪而問。佛得。答曰。掌必不离行。為上。云
キナミ。尼自身に意を持ひ。了か。身も。心も。がゆく。と
キナミ。身も。心も。がゆく。まか。うらうら。と。言ふ。不
のれ。うづ。よも。の耳も。向。のま。へ。眼も。ま。と。こ。へ
御。よ。や。う。き。鳥。窠。猿。呼。樂。天。対。諸。惡。美。供。衆。善。奉
行。ト。示。さ。や。ト。ニ。三。業。付。四。事。乃。四。事。モ。か。一。ビ。統。モ。ノ。是。ト
解。持。ハ。恩。魯。ナ。う。ざ。ト。ハ。百。事。付。兩。モ。か。一。ビ。統。モ。ノ。是。ト
ナリ。ト。多。往。モ。遠。セ。ア。リ。事。小。考。ハ。大。の。敵。ナ。う。ト
○布。リ。ナ。う。小。四。ナ。三。安。の。養。生。ト。ナ。リ。四。ナ。ハ。少。飲。食。少。

文莊少言猿も思慮也三安ハ安分ヲ安心ア安死生也
さうモ四才於事よりざつて況ヤ三安ハ賢者也高志を何ぞく
やれんせんせん老ニキテ小布モウのすなたの三月生の養生
となろと之の餘鬼のひ食りよるのうも

○けは百如沫師の法徳と示さうモわか人の寝^木の縮^{アラマツ}
ふあらばがま行き僻とすらうむく行うはかく^{アラカク}ハ
よもとうばうのまくふきに羅摩^{ラクマ}如^{シキ}音^{トモカラ}傍^{カタ}のまく
ハ通當の薬石なり

○観^{ミルモ}山林系^リ如^{シキ}猿隨^{アラマツ}其見顔之高ト^トシテ^ト人^ノの
詮^{シテ}と仰阿^ハ仰^ハ仰^ハあくあき付^{スル}かを老^ニ再び^ス人^ノ
とれすよ同^シのふう^ハばく^ハま^ハから^ハと^スそらす^ハが
ま^ハり^ハ行^ハが^ハう^ハぬ^ハ用^ハも^ハ月^ハ病^ハも^ハ薬^ハ集^ハて^スかよ^ハ通^ハし

うか^ハ入^ハね木^系老^ニか^ハ眼^ハか^ハり^ハさ^ハぐ^ハゆ^ハ自^ハ古
頬^ハと^スよ^ハの^ハわ^ハか^ハ一^ハき^ハみ^ハく^ハび^ハ人の^ハお^ハが^ハも^ハせ^ハぬ^ハ
に^ハう^ハ万^ハよ^ハと^スよ^ハじ^ハ老^ニか^ハ一^ハか^ハな^ハと^スい^ハう^ハ小^ハか^ハ人^ハ渺^{スナ}
一^ハや^ハと^ス詮^ハく^ハよ^ハお^ハと^スあ^ハく^ハう^ハ骨^{カニコ}ま^ハり^ハち^スして^ス後^ハゆ^ハ
も^ハ行^ハあ^ハく^ハと^スい^ハう^ハ吾^ハ傍^{カタ}の^ハ僻^ハと^スい^ハう^ハケ^ハで^ス
ま^ハる^ハ年^ハ小^ハま^ハう^ハる^ハには^ハき^ハても^ハ世^ハ解^ハや^ハや^ハト^スう^ハん^ハと^スせ^ハく^ス

ふさか

あつひのあはなうきをへてあたごのと
すかがれいからくよしにほんづらわさ
るよかられてかがくがくにさげつひゆう
をうめたかねがよがよたうきをうめ
てくわくわくわくわくわくわくわくわく
あはなうきのうきをうきをうきをうきを
たてうきのうきをうきをうきをうきを
まかんがくわくわくわくわくわくわく
たかにゆくわくわくわくわくわくわく

あらわやかがふ生れへ被言ひ
まことへばくわくまのうがれ言ひ序ふとくか
ごくくくがくやまけりはよりて端よ終す
まゆうまく言ほてんとくもすくらうもく
まゆうわくとくしけねがすまくふらう
うよこまくはうせつめとくとくしてかうづ
まゆくまく

まゆくまく

馬伴貢観誌

享和元年辛酉春三月刊行

林伊兵衛

木村吉右衛門

齋藤莊兵衛

鶴鶴惣四郎

平安書肆

